ISSN 0388-9750

桜門春秋

NIHON UNIVERSITY
2025
No.151



特集

日本文化の海外発信



2025 No.151

CONTENTS

桜門春秋

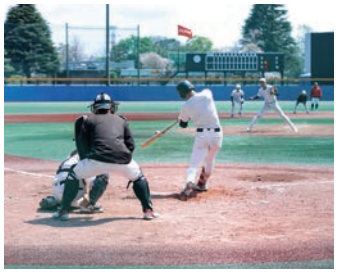














1 ●巻頭特集
医学部創設100年



5 ●特集
日本文化の海外発信

6 **1. 映画** 日本映画は第3の黄金時代に
芸術学部 古賀 太 教授

8 **2. 観光** モノからコトへ 変わる観光戦略
理工学部 押田 佳子 准教授

10 **3. 産業** 世界につながる地場産業の技術
商学部 長谷川 英伸 准教授

12 **4. 日本酒** 日本酒を世界のテーブルに
酒ジャーナリスト 葉石 かおり氏

15 ●ようこそ研究室へ
商学部経営学科　周 炫宗ゼミ
日韓企業の比較研究を通じ
経営学の理論と実践を学ぶ

18 ●未来を拓け! 各学部 実践授業
文理学部教育学科
知的障害教育論

20 ●ここにも! 日大のDNA
野村 純司氏　有限会社野村煎豆加工店社長

23 ●学び舎の記憶
第9回　桜門ビル

26 ●明日の覇者へ 日大アスリートの挑戦
第10回　野球部
創部100年の記念の年に全力で日本一を掴む

28 ●先生からのひとこと
日本大学山形高等学校　野口 敏広 教諭
「本物を見ること」
29 土浦日本大学中等教育学校　網野 秀太郎 教諭
「日大・付属の輪」

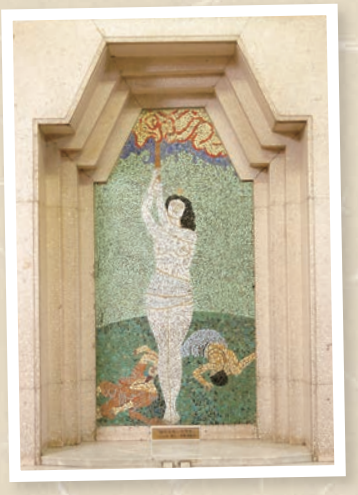
30 ●がんばる付属生
日本大学藤沢高等学校　田金 優希さん
31 千葉日本大学第一高等学校　望月 玲那さん

32 ●付属校ニュース 北から南から

37 ●刊行物／編集後記

巻頭特集

医学部創設100年













医学部は、大正14（1925）年3月31日に日本大学専門部医学科として正式に認可されてから、今年で100年を迎えた。

この歴史は、卒業生や教職員、関係者、地域社会の皆さまの支えによって築かれたもの。

国内私立大学の医学部として最初期に誕生したその歩みを振り返り、未来を展望する。

第1部　創設から昭和初期　専門部医学科の創設

専門部医学科の創設

大正14（1925）年3月、医学部の前身となる日本大学専門部医学科が創設された。ドイツ留学から帰国後に東京市麻布区（現港区）で開院していた額田豊（ぬかだゆたか）は、医科大学重視の政府方針とは異なる、短期間で臨床医を養成する医学専門学校の設立を構想していた。

本学理事で友人の鹽野季彦（しおのすえひこ）に相談した結果、山岡萬之助学長（後に第3代総長）ら首脳陣と会談が行われ、日本大学が専門部に医学科を設けることで話が進み、額田は初代医学科長に就任した。修業年限4年、募集人員120人で、第1回の入学試験には1800人が応募した。

校舎は関東大震災後に駿河台に建てられたトタン屋根の仮校舎で、専門部歯科・高等工学校と同居だった。半年後、新築された専門部歯科の付属病院兼校舎へ移転。15年10月には、隣接地に病床100床の専門部医学科付属病院兼校舎が完成した。

駿河台から郊外移転

昭和初期、医科大学と官公立の医学専門学校の卒業生は無条件で医師免許を取得できた。一方、私立専門学校の場合、文部大臣の指定校の卒業生以外は難関の医師試験に合格しなければならなかった。

専門部医学科は、第1回生卒業直前の昭和4（1929）年2月に指定校の認可を受け、翌年、卒業生に「日本大学専門部医学士」の称号を与えることが認可された。

さらに基礎医学教育の充実を図り、修業年限を1年延長する認可を取得。6年度は4年制と5年制に分けて入試が行われた。

こうして質的充実が図られる中、校舎の郊外移転が決定され8年8月、現在校地となっている板橋区大谷口（おおやぐち）に土地を入手。付属病院が10年5月に開院（病床34床）、12年3月には校舎が落成した。4月に式典と祝賀会が催され、学生800名が駿河台から板橋まで行進した。



専門部医学科付属病院（昭和3年頃）



創設時の駿河台仮校舎（手前）と建設中の専門部歯科付属病院（大正14年6月）



山岡 萬之助（大正14年頃）

創設者　額田豊

明治11（1878）年～昭和47（1972）年。岡山県生まれ。医学博士。



曽祖父・祖父・父と3代続いた医師の家系出身。明治34（1901）年に東京帝国大学医科大学に進み、卒業後は同大学付属病院の内科教室に入局。40年3月から私費でドイツに留学し、42年6月帰国。大正2（1913）年医学博士。同年麻布に額田病院を、9年鎌倉に額田保養院を開業した。

当時「医学教育は大学でなければならない」という「医育統一論」が唱えられ、官立の医学専門学校が相次いで医科大学に昇格したが、その学制によると卒業は28歳から30歳となることも少なくない。額田博士はドイツ留学の経験から臨床医の育成は4年制の医学専門学校で可能であると確信し（『日本大学医学部50年史』）、日本大学専門部医学科と帝国女子医学専門学校（東邦大学医学部の前身）の設立を主導した。15年3月前者の初代科長に就任。昭和7（1932）年に顧問となるまで、その教育理念は数多くの教員・学生に影響を与えた。

第2部

昭和初期から現在へ

医学部の設置と発展

戦前・戦中の板橋校舎

私立大学の中でも医科大学は施設・設備に経費がかかることもあり、昭和初期には、大正期に認可された慶應義塾大学医学部、東京慈恵会医科大学、日本医科大学の3大学のみであった。

板橋への移転後、付属病院の増築や図書館拡充などを行った結果、昭和17（1942）年3月、本学の医学部設置が認可された。私立大学では、終戦までに設置された最後の医学部となった。4月から予科生を受け入れ、校舎も増築。専門部医学科は23年3月で廃止となった。

19年、医学部の予科は予科理科乙類へと改称。学生は工場への勤労動員などで満足な授業は受けられなくなっていた。20年4月、板橋病院は空襲により大部分が焼失するも、23年11月には復興を果たす。復興までの一時期は長野県岡谷市の市立病院を借り受け、22年4月まで日本大学の付属病院とした。

東洋一の病院が完成

昭和24（1949）年2月、本学は新学制による設置認可を受けたが、医学部・歯学部は、27年2月の設置認可となった。

認可を前提に26年には駿河台病院は臨床、板橋病院は臨床研究と、付属病院の役割を明確にして組織を整備・充実させ、板橋病院を29年4月までに450床に拡充した。

同年7月、私立の医学部・歯学部の大学院開設は31年4月からと決定され、準備を進めた。そのため、板橋に臨床講座各室、総合研究室などを備えた鉄筋校舎の建設が必要となったが、大学の資金では賄いきれず医学部教職員、同窓会、父兄から寄付金を集めた。30年9月、第1病棟を増築（病床160床）。31年3月大学院に医学研究科の増設が認可され、同年中に板橋に大学院棟、診療棟（外来棟）が完成した。

新制医学部としての教育・研究体制が整ったものの駿河台病院は老朽化による建て替えが必要となり、38年5月に新病院（病床420床）が落成。開院式で板橋病院の増改築が発表された。建設案は41年9月に決定され、45年6月、病床1200床の「東洋一」の病院が完成した。



板橋病院（手前）と校舎（昭和14年）



昭和50年ごろの板橋キャンパス



昭和46年度 医学部大運動会

第3部
現在から未来へ
次世代の医療人材育成へ

学部、専門学校、病院の建て替え

創設100周年を迎えた医学部は、新たな時代に向かう基盤づくりを進めている。その先鋒（せんぽう）である医学部付属板橋病院の建て替え等に伴う一連の工事が、本格的に動き出した。新時代の医療をけん引する医学部、看護専門学校、大学病院として順次、刷新が進んでいく。

工事の第1段階として、令和7（2025）年度内に完成予定の医学部附属看護専門学校の新校舎と医学部仮設校舎の建設工事を進めていく。

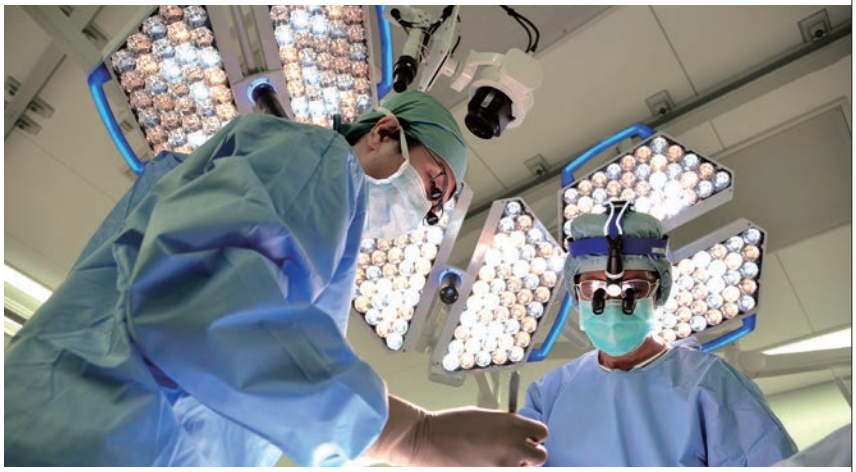
これらの建設工事を終えると、現在の看護専門学校1号棟、プール、体育館などを解体。第2段階として、新学部棟の建設工事が10年度に完了予定。その後は医学部機能を移した上で本館棟、臨床講堂棟、仮設校舎などを解体し、跡地に第3段階として、14年度開院を目指す新病院の建設を予定。地域医療の拠点ならびに最先端の研究・教育拠点となり、優れた医療人材の育成を目指す。


現在の医学部本館棟


創設70周年を記念して建てられたリサーチセンター


現在の板橋病院


学内に飾られた医学部のシンボル


優れた医療人材の育成を目指す

特集

日本文化の海外発信

インターネットやSNSが一般化した今日、日本文化を世界に伝える手法は多様化している。一方、海外からの観光客が日本人の出国者数を上回り観光立国への取り組みは一層加速している。日本文化の発信は、お互いの理解を促すだけでなく今後の経済活動にも大きく影響する。いま、観光や産業の現場で何が起きているのか。各分野の専門家を訪ね、現状と課題を聞いた。







1.映画
日本映画は第3の黄金時代に
●芸術学部 古賀 太 教授

2. 観光
モノからコトへ 変わる観光戦略
●理工学部　押田 佳子 准教授

3. 産業
世界につながる地場産業の技術
●商学部 長谷川 英伸 准教授

4. 日本酒
日本酒を世界のテーブルに
●酒ジャーナリスト 葉石かおり氏

映画

日本映画は第3の黄金時代に

1895年、投影式の映画を実用化したリュミエール兄弟は世界中にカメラマンを派遣し、異国の映像をパリ万博で公開した。日本の映像も関心を集め、日本映画と海外をつなぐ発端となった。日本映画の海外進出の歴史と今後の課題について、芸術学部映画学科の古賀太教授に聞いた。

※世界3大映画祭と言われるベネチア国際映画祭（イタリア）、カンヌ国際映画祭（フランス）、ベルリン国際映画祭（ドイツ）について、本稿ではベネチア、カンヌ、ベルリンと略記する。

INTERVIEW



黒澤明『羅生門』より　(C) 1950 KADOKAWA

世界に認められた日本映画

――日本映画の海外進出の歴史を教えてください。

日本映画には過去2回の黄金時代がありました。19世紀後半のロンドンやパリの万博で日本への関心が高まったことを受け、1930年ごろから日本の映画界も海外に向けて積極的に働きかけるようになりました。38年に田坂具隆監督の「五人の斥候兵」がベネチアで受賞したものの、第2次世界大戦でこの流れは中断します。

大戦終了後、国際映画祭が再開するとともに最初の黄金時代が始まります。51年の黒澤明の「羅生門」を皮切りに溝口健二、衣笠貞之助などの監督がベネチア、カンヌで相次いで受賞。時代劇ながら黒澤の普遍性と溝口の芸術性は高く評価され、以



芸術学部映画学科
古賀 太 教授

昭和61年九州大文学部卒。早稲田大大学院文学研究科中退。国際交流基金、朝日新聞社を経て平成21年より現職。国際交流基金と朝日新聞社在職中、日本と海外の文化交流に深く携わった。著書に『ヌーヴェル・ヴァーグ 世界の映画を変えた革命』など（P37に関連記事）。

後海外ではヌーベルバーグの監督たちにも影響を与えました。

60年代以降しばらく冬の時代が続き、再び注目を集めるのが80年から90年代です。大島渚や今村昌平、北野武、河瀬直美などの監督が、それまでの日本映画とは全く違う、斬新な作風が衝撃的でした。2002年には宮崎駿がベルリンで受賞し、日本のアニメーション人気を不動のものとします。これが第2の黄金時代です。

最近注目されているのは、若い世代の監督の台頭です。1978年生まれの濱口竜介が2021年から23年にかけて3大映画祭で連続受賞したのがその最たる例。受賞はなかったものの、昨年カンヌに出た山中瑤子、奥山大史はともに20代です。今年のカンヌでもコンペの早川千絵はじめ、さまざまな部門に6本も出品されているなど、現在まさに第3の黄金時代にあると言っていいでしょう。

観光振興策の一つとして支援を

――日本映画の今後の課題は。

世界に名だたる名監督を輩出する一方、日本の映画会社が海外展開を積極的に行ってきたわけではありません。日本国内の映画館入場者数は1958年をピークに、テレビの普及に伴って激減しました。しかし70年以降は興行収入も底を打ち、人口が増え続ける限りあえて海外に出る必要はありませんでした（【表】参照）。

ところが近年、少子化による人口減少、すぐに海外につながるインターネット配信の定着などさまざまな要因から、海外に目を向けるようになりました。具体的には世界配給を行うヨーロッパの配給会社や、海外のプロデューサーと組んで資金調達するといった動きが出ています。

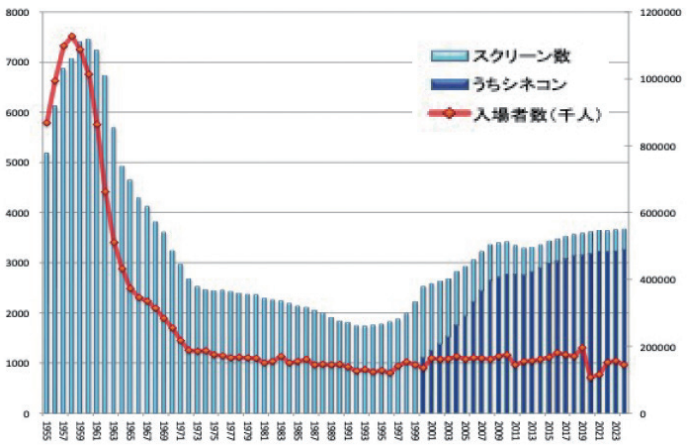
アジア全体の映画も質が上がっており、既にアジアの映画祭も注目度が上がっています。東京国際映画祭も今以上に海外からの注目度を高めたいところです。映画は見た人に行ってみたいと思わせる力を持つ有力なメディアです。観光振興策の一つとしても、国の支援があっても良いのではないかと考えています。

――本学にできることはあるでしょうか。

学生には海外留学を勧めています。今後は英語で行う授業があれば、海外からの留学生を増やすことにつながります。特に中国は映画の輸出先、人材の成長という両面で注目されています。在学中に海外の優秀な学生と一緒に映画製作やビジネスを学べば、必ずプラスになるはずです。

テレビ局や配信会社が映画製作に関わり、スマホでも動画が撮れるなど、映像製作につながる道は多様化しています。その意味でも教育の内容を変えていく必要があります。実際に塚本晋也、片渕須直など、本学でさまざまな学びを経験した先輩が数多く活躍しています。こうした先輩に続き、国内のみならず海外で活躍できる優秀な人材が育ってくれるよう期待しています。

【表】入場者数（右）とスクリーン数（左）の推移
（日本映画製作者連盟資料より）



【参考資料】　国際的映画祭で受賞した主な日本映画作品
※本文の記載と関係のある年を抽出（編集部作成）

第1期黄金時代
1951年　「羅生門」黒澤明
　　アカデミー賞／名誉賞　ベネチア／金獅子賞
52年　「西鶴一代女」溝口健二　ベネチア／国際賞
53年　「雨月物語」溝口健二　ベネチア／銀獅子賞
54年　「地獄門」衣笠貞之助
　　アカデミー賞／名誉賞　カンヌ／パルム・ドール
　　「山椒大夫」溝口健二　ベネチア／銀獅子賞
　　「七人の侍」黒澤明　ベネチア／銀獅子賞

第2期黄金時代
97年　「HANA－BI」北野武　ベネチア／金獅子賞
　　「うなぎ」今村昌平　カンヌ／パルム・ドール
　　「萌の朱雀」河瀬直美
　　カンヌ／カメラ・ドール（新人監督賞）
2002年　「千と千尋の神隠し」宮崎駿
　　ベルリン／金熊賞（最高賞）

第3期黄金時代
18年　「万引き家族」是枝裕和
　　カンヌ／パルム・ドール
21年　「ドライブ・マイ・カー」濱口竜介
　　アカデミー賞／国際長編映画賞
　　カンヌ／国際批評家連盟賞他
　　「偶然と想像」濱口竜介
　　ベルリン／銀熊賞
23年　「悪は存在しない」濱口竜介
　　ベネチア／銀獅子賞

観光

モノからコトへ 変わる観光戦略

平成15年、国土交通省がビジットジャパンキャンペーンを開始して以来、訪日外客数は増加を続け令和6年には約3687万人に達した。（【図1参照】）急激な数の増加は観光の質的変化をもたらすとともに新たな課題も生んでいる。観光の現場で何が起きているのか。理工学部まちづくり工学科の押田佳子准教授に聞いた。

急激な訪日外客数の増加が観光の変化をもたらした

平成15年当時、約521万人だった訪日外客数は27年には約1974万人となり、昭和45年以来45年ぶりに出国日本人数を上回った（【図1】参照）。押田准教授は「入国数と出国数の逆転により、日本文化を海外に発信するだけでなく、国内でいかに正しく理解してもらうかが重要になってきました」と話す。

最近15年間でリピート数と滞在日数が共に増え（【図2、3】参照）、定番の観光地や爆買いツアーから、地方の食や文化を知る旅行にシフトしていることも特徴だ。そのため各観光地では単に来訪者数を追求するのではなく、より快適な観光を目指して新たな試みがなされている。



観光客であふれる鎌倉の小町通り

●混雑を緩和し快適な観光を

日本庭園や自然公園、神社仏閣を見学する際のマナーなど日本のしきたりを上手に伝えようという動きが出ている。また来訪者の多様化に伴いイスラム教徒のための礼拝施設やハラル食品を用意する地域も増えた。

「お互いの文化の違いを理解し、歩み寄ることでトラブルを避け、ファンづくりにもつながります」と同准教授。

また、混雑を緩和するために、場所と時間帯を分散することも行われている。例えば京都のような大型の観光都市では、宿泊を近隣の観光地に誘導し、市内集中を避けている。また各地の桜の名所では夜桜の公開時間を増やすなど、昼から夜へ分散する試みもある。冬が人気の長野県では、夏のキャンプやグランピングをPRし、季節の分散を図っている。



理工学部まちづくり工学科
押田 佳子 准教授

平成12年神戸女学院大人間科学部卒。17年大阪府立大大学院農学生命科学研究科農学環境科学専攻博士後期課程修了。同年同大大学院客員研究員、18年本学理工学部研究員等を経て27年より現職。緑地計画、造園学、観光まちづくりが専門。鎌倉市緑政審議会委員などを務める。

「リピーターには酒蔵見学や陶芸体験など体験型の観光が有効。場所と時間帯の分散は新たな需要開拓にもなるといえます」

●新たな観光戦略の構築が要

「こうした取り組みの中で、DMO（観光地域づくり法人）が果たす役割りが注目されます。観光の質を高めるために、あえてターゲットを絞り込む地域もある」と押田准教授。例えば広島県は、厳島神社を日本のモン・サン・ミシェルと見立て、親近性のあるフランスからの集客に力を入れている。言語など全ての地域を対象とするのは難しく、国や地域を絞った方が対応もしやすくなり、来訪者の満足度も高まることが期待できる。

「地域マネジメントに注力するDMOであれば、モノからコトへの転換や相手国を想定した地域のプロデュースが、今後の観光戦略の要になるでしょう」

未来を見据えた課題解決に挑む

訪日外客の増加に伴い、オーバーツーリズムの問題も顕在化してきた。観光地の規模や観光従事者不足など地域によって事情は異なるため、オーバーツーリズムという基準は設定しづらいのが実情。

「観光地であっても地域住民の生活が基本。住民の許容限度を超えるかどうかが最低限の目安になります」と言う。先に挙げた場所と時間の分散やターゲットの絞り込みもオーバーツーリズム対策の意味も持つ。

イタリアのベネチアのように入場税を設けても、少額であれば観光客には抑止になり難い。富士山や白川郷のように観光時期や来客数を制限する方が有効。とはいえ、数の制限は観光収益の減少にもつながる。「住民と観光客の双方が納得できるバランスを模索するしかありません」

現在のオーバーツーリズムは観光客の増加に加えコロナ禍によって観光従事者が大量に離職したことも影響している。「一度離れた人材は戻ってこない。本学なら全国にネットワークがあるため、大学で教育を受け、地方に戻って活躍する人材を育て、貢献できるのでは」と押田准教授。

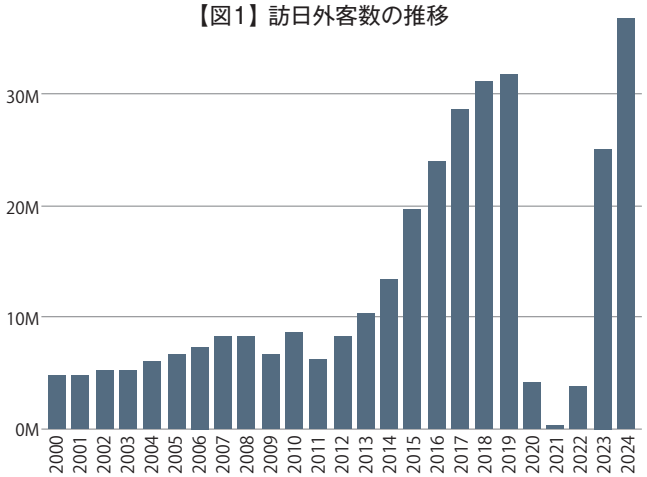
●観光危機管理という新たな課題

訪日外客の安全を確保することも今後の大きな課題となっている。地震などの災害が発生した場合、3日以内に帰国させるか、国内の安全な場所に待避させることが暗黙のルールだ。現状で訪日外客の待避を仕組み化しているのは沖縄県を筆頭に、他には東京や大阪などに限定される。

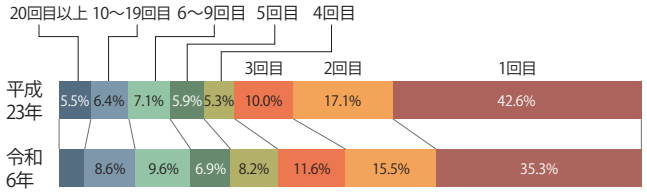
「観光危機管理は学問としても新しい分野。私自身も力を入れて取り組んでいきたい」と力を込めた。


自然の観光資源を傷めないルールづくりを

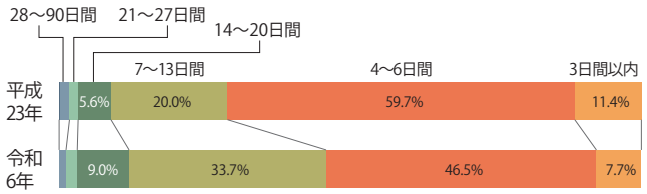
【図1】訪日外客数の推移



【図2】訪日外国人の訪日回数の変化



【図3】訪日外国人の滞在日数の変化



出典:日本の観光統計データ（日本政府観光局）

産業

世界につながる地場産業の技術

日本のものづくりを支える地場産業。市場縮小の波にのまれながらも経営者の世代交代により新たな海外展開の模索が始まっているという。全国的各地の地場産業でどのような取り組みが行われているのか。中小企業経営を研究する商学部経営学科の長谷川英伸准教授に聞いた。



豊岡鞄の縫製（写真提供：兵庫県鞄工業組合）

地場産業の世代交代で第三の創業が起きる

日本の地場産業は地域の中小企業が分業体制を構築し、地元の原材料や伝統技術を使って独自の製品を製造してきた。家具や陶器、金物など日用品が多く、工芸品として価値の高い製品もある。江戸時代から続いている地域もあるが、バブル経済崩壊以降、生産額、従業員数共に減少に転じ（**【図1】参照**）、平成12年に全国553カ所あった産地が、27年には252まで半減した。

「大きな流れは変わっていないが、復活に向けて新しい兆しが見える」と長谷川准教授は話す。

同准教授が着目しているのは若い世代の登場だ。「地場の中小企業で世代交代が進み、第二、第三の創業といえる動きが出てきた。職人数が減る中、女性の割合が増えているこ



商学部経営学科
長谷川 英伸 准教授

平成20年和歌山大経済学部卒。25年兵庫県立大大学院経営学研究科博士後期課程単位取得退学。27年博士号取得（経営学）。25年玉川大助教等を経て令和6年より現職。三木金物、豊岡鞄など兵庫県内の地場産業に詳しい。

とも新しい変化」（【図2】参照）という。中小企業が抱える問題は国際化、情報化に対する取り組みにあるといわれるが、若い経営者は海外進出に関心が高くＩＴ（ＳＮＳ等）の知識もある。人材育成や地域経済への視点も柔軟で、従来の枠組みを変える原動力になっている。

創業者が目指すこれからの世界戦略

少子化による国内市場縮小の打開策として、海外市場の開拓は必須だ。さまざまな事例がある中、長谷川准教授は自ら研究を行った兵庫県三木市の特産品・三木金物を挙げる。大工道具をはじめとする金物生産で有名な三木金物だが、フランスやイタリアの園芸家に剪定（せんてい）ばさみが人気だという。海外の見本市に出品したところ、切れ味や耐久性がリンゴの剪定に適していると、広く知られることになった。

「今まで知られていない製品でも品質の良さが伝われば売れる。相手国に合わせた使い勝手やデザインに変更すれば、さらにチャンスは広がります」

特筆すべきは一企業の製品ではなく、三木地域全体の産業としてアピールしていること。「製造者と卸売業者が連携して多様な需要に応えている。地場産業本来の分業のメリットを生かした海外進出の好例」と評価する。

●伝統の枠を超えた商品開発

時代の流れに合わせたものづくりを生み出してきたことも、地場産業の特徴。眼鏡のフレームで有名な福井県鯖江市は越前漆器の産地でもある。従来の技術を生かしつつ、新たな製品作りを進める例が兵庫県豊岡市の豊岡鞄だ。１０００年以上続く柳行李から皮や布に素材を広げ、日本一の鞄の産地となった。同市では職人を育成する「トヨオカ・カバン・アルチザン・スクール」を開校しているが、ものづくりと同時に工場見学等による現場も体験できるカリキュラムも運営。同准教授は「作るだけでは売れない現実を踏まえて育成しています。女性の職人が多いのも特徴」と独自の展開に注目している。

●観光との連携が今後の課題

一方で「ものづくりの海外展開を考える上で外せないのが観光との連携」と指摘する。インバウンドの増大を取り込むことで新たな需要開拓が期待できる。

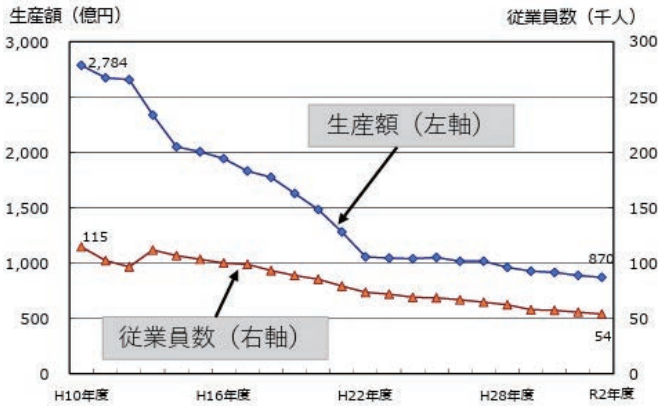
アップル社のオフィシャルマグカップの製造元として有名になった長崎県の波佐見焼き産地は、工房見学や陶器作りの体験ツアーを企画している。

「インバウンドの増加は絶好の機会。近隣の温泉地や景勝地と連携して海外顧客を取り込むべき」と話す。

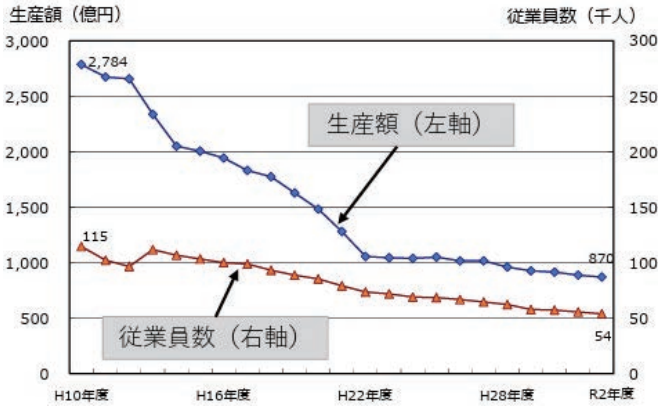
●学生の意見を生かす日が来るか

地場産業の再編は、熱量の高いキーパーソンに共感して人が集まり、失敗を繰り返して定着することが多い。こうした経営者が欲しがっているのは、国内・海外の若い世代のニーズや好みの情報だ。長谷川准教授は「本学は日本一社長を輩出している大学。地域で奮闘する先輩経営者と学生のコラボにより、地場産業の海外進出をサポートできるのではないか」と語った。

【図1】伝統工芸品の生産額･従業員数の推移



【図2】伝統工芸士数の推移



出典:一般財団法人伝統工芸品産業振興協会

日本酒

日本酒を世界のテーブルに

日本の食文化を代表する飲料として海外でも人気の高い日本酒。昨年末には日本の「伝統的酒造り」がユネスコ無形文化遺産に登録され、ますます注目されている。本学卒業後、さまざまな活動で日本酒の普及に貢献している酒ジャーナリストの葉石かおり氏に日本酒の未来を聞いた。

INTERVIEW



酒ジャーナリスト
一般社団法人ジャパン・サケ・
アソシエーション会長
葉石 かおり 氏

平成元年本学文理学部独文学科卒。ラジオリポーター、女性週刊誌の記者を経てエッセイスト、酒ジャーナリストとして活躍。「酒と健康」「酒とペアリング」を核に各メディアに寄稿、コメントを寄せる。平成27年、酒類卸売企業と共に一般社団法人ジャパン・サケ・アソシエーション設立。『酒好き医師が教える最高の飲み方』（日経BP）ほか著書も多い。

海外を視野に入れ多様化する日本酒づくり

――海外で日本酒人気が高まってきた経緯を教えてください。

平成10年代後半から、観光立国を目指して日本政府がキャンペーンを展開するなど、日本文化を発信するさまざまな取り組みがなされてきました。実際にインバウンドのお客様も増え、日本酒を飲んで好きになったという方も増えています。

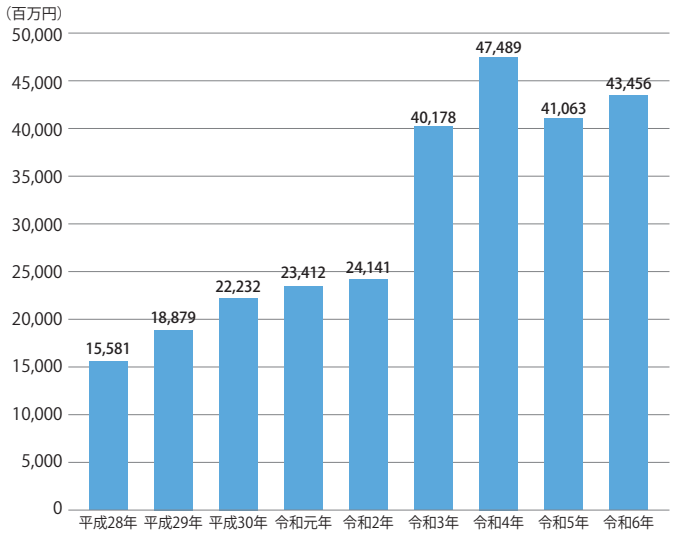
最も影響が大きかったのは、25年に「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されたこと。ヘルシーな和食に世界中が注目し、同時に日本酒への関心も高まりました。輸出される日本酒の量も年々増え続けています（**【図1】参照**）。

輸出相手国で見ると、金額が最も多いのは中国、2位が米国で以下香港、韓国、台湾です。数量では米国が1位となり中国、韓国、台湾、香港。いずれも上位10カ国に広げると、ヨーロッパも含まれてきますので、世界中で飲まれていることが分かります（**【表1】参照**）。日本酒自体もフルーティーな味わいの製品が増えていることも人気の理由になっています。

――日本酒の味が変わってきているのですか？

従来の日本酒は甘い、辛いという比較的平坦な味わいのものが好まれてきました。お酒の味や香り、風味といった酒質を左右するのが酵母です。この酵母は以前から各県の技術者が研究を続けています。例えば約20年前にＴＹ２４という苦味を生む酵母が開発され、蔵元と共同で新たなお酒ができるようになりました。こうしたワインのような苦味や酸味のある日本酒は海外でも好まれ、広がっています。

【図1】最近の日本酒の輸出動向



出典:財務省貿易統計局

また、製造方法も大きく変わっており、温度や湿度、風通しなどほとんどの工程がコンピューターで管理されています。酒質の設計段階で使う酵母やお米、精米の歩合などを決めておけば、最初から海外で飲まれることを想定したお酒造りもできるようになっています。昔のように自然条件で出来が変わるということはありません。

――海外で製造している蔵元もあると聞きました。

輸送の際の揺れや温度管理がうまくいかず風味が落ちるという問題がありました。現地で作ればそれもありませんし、コストも抑えられます。もっとも最近では瞬間冷凍で風味を落とさず輸送することもできるようになっています。

日本は少子化で市場には限界があり、人手不足という問題もあります。一方、蔵元の世代交代が進み、先端技術を積極的に導入するようになっています。海外に展開する例は今後も増えていくでしょう。

日本酒の魅力を伝える伝道師を育成

――葉石さんご自身も日本酒の普及に取り組んでいます。

平成27年にお酒の卸売企業と協力して一般社団法人ジャパン・サケ・アソシエーション（ＪＳＡ）を立ち上げ、現在会長を務めています。

「日本酒を國酒から、国際酒へ」という理念を掲げ、正しい知識を持っておいしい日本酒を飲んでいただく人材を育成するための活動をしています。海外に日本酒を持っていくだけでは不十分で、正しい飲み方を現地で伝えていく、いわば伝道師となることが必要だと考えました。そうして誕生したのが「ＳＡＫＥ ＥＸＰＥＲＴ（サケ・エキスパート）」という資格制度です。ＪＳＡは、海外でサケ・エキスパートを育成する教室を運営し、日本酒を知っていただくイベントも開催しています。

――海外の教室はどこにありますか。

最初はタイに開校し、イタリア、台湾で運営しています。ＪＳＡは今年で10年になりますが、これまで約１０００人がサケ・エキスパートの資格を取っています。

イタリアはワインの国だけあって

【表1】日本酒の輸出相手国

金額順位	国名	金額（百万円）
1	中国	11,678
2	米国	11,442
3	香港	5,117
4	韓国	3,750
5	台湾	2,670
6	シンガポール	1,484
7	カナダ	1,041
8	オーストラリア	782
9	英国	637
10	フランス	552

数量順位	国名	令和6年（千リットル）
1	米国	8,003
2	中国	5,324
3	韓国	4,895
4	台湾	2,890
5	香港	2,015
6	カナダ	926
7	シンガポール	702
8	オーストラリア	678
9	ドイツ	614
10	タイ	461

出典:日本酒造組合中央会ホームページを基に作成

て、受講されるのはほとんどが現役のソムリエ。非常に熱心で技術的なことまで細かく質問されるので、3時間の講義が4時間半に及ぶこともあります。台湾の方々は日本酒造りと神事の関わりなど歴史的なことにも関心を持たれます。

――今後の活動の予定は。

今年の6月に台湾で酒―1グランプリを開催します。元々このイベントは、お酒の聖地である京都の松尾大社で開催しているもの。全国から蔵元が集まり、一般のお客様に利き酒をしていただいて投票でグランプリを決めます。これと同じイベントを台湾で行い、現地の方々にも楽しみながらお酒の味を知っていただこうと思っています。

イタリア教室でのセミナーの様子






目標は一生健康にお酒を飲み続けること

――お酒と健康に関する本も多数出版されていますね。

一般にお酒に関する書籍は多いのですが、お酒と健康の関係をしっかりとしたエビデンスに基づいて書いている本は、ほとんどないのです。私自身も「一生健康にお酒を飲む」ことが目標なので勉強にもなるし、読んだ方から参考になったと言われるととてもうれしく思います。

『酒好き医師が教える最高の飲み方』は英語、イタリア語、中国語、台湾語、タイ語で翻訳され、おかげさまで国内では21万部を超えるベストセラーになりました。それだけ世界中の人々がお酒と健康に関心を持つようになっているということですね。

――本学を卒業されたことで生かされていることはありますか。

講演会や企業、学校での研修会なども行っているのですが、全国どこに行っても卒業生の方にお会いします。お酒の仕事とは限らず関わりができてネットワークが広がっていくのは頼もしいですね。



『酒好き医師が教える最高の飲み方』は海外でも人気

――最後に、日本酒の未来に懸ける思いを一言お願いします。

世界中どこの飲食店でも当たり前のように日本酒が飲めることが夢です。熱心な蔵元も多いので、日本酒がワインと並ぶ国際酒になる可能性は十分にあると信じています。





Welcome to the laboratory

ようこそ研究室へ

基本的な理論から最新の経営分析まで、経営学の網羅する範囲は幅広く奥が深い。商学部経営学科には優れた教員がゼミを開講し、独自の研究を展開している。今回は日韓企業分析に力を入れる周炫宗ゼミを訪ねた。

商学部経営学科
周 炫宗ゼミ

准教授 周 炫宗（ちゅう・ひょんじょん）

平成7年韓国・延世大経営学科卒。16年慶應義塾大大学院商学研究科博士課程修了。博士（商学）。同年野村総合研究所ソウル支店、19年慶應大研究員、20年千葉経済大専任講師等を経て令和3年より現職。

日韓企業の比較研究を通じ経営学の理論と実践を学ぶ

企業の価値創造を学際的に解く

人を核とした組織経営を理論と実践の両面から学びグローバルな視点も養う

周炫宗ゼミは、経営組織論、経営管理論、経営戦略論など経営学の根幹を成す分野を総合的に学ぶことを目指している。中でも企業における「価値創造」に着目し、理論的アプローチ、実践的アプローチの両面から研究を行い、理解を深めていく。特に周准教授が重視するのは、人と組織の関係だ。

企業の成長と新たな価値創造を促す要素として、同准教授が重視するポイントは二つある。一つ目は、失敗から学ぶことだ。現状に甘んじて挑戦を避けている限り、成長は成し得ない。常に新たな分野を開拓し、失敗してもそこから学びを得る組織づくりをすることが必要になる。二つ目は組織内に心理的安全性を確保すること。上司や他者からの評価を気にして自由な発言や行動ができない組織では、創造性が発揮できない。善意に基づく自由な発言が認められ、正しく評価される環境をつくることが経営トップの重要な役割となる。さまざまな企業の事例研究を通じて、組織マネジメントの本質を理解していく。

また周ゼミならではの特徴として挙げられるのが、日韓企業のマネジメント研究だ。周准教授が韓国出身ということもあり、一般では知り得ない韓国企業の実態を知ることができる。既に学んだ経営学の総合的な知見を実践的に生かすことも目的だ。韓国は日本に近い外国でもあることから、研究を通じてグローバルな視点や関心を持つことにもつながっている。




②


③

2年生から4年生まで段階を踏んで知見を深め応用力を身に付ける

周ゼミには現在2年生13人、3年生12人、4年生8人が所属しており、各学年で独立した活動を行っている。

プレゼンテーション能力の向上

2年生は経営学の標準的なテキストを使い、輪読形式で専門知識を学ぶ。毎回担当を決めて学生が発表を行うため、単に知識を得るだけではなくプレゼンテーション能力を高めることができる。


④

日韓企業の研究に取り組む

3年生では、グループワークによる日韓企業のマネジメント研究を行う。それぞれが自分の関心のある産業分野から、規模や業務内容が類似する企業を選定する。これまで自動車ではトヨタと現代、化粧品分野の資生堂とアモーレパシフィックなどを取り上げてきた。グループといっても1チームは2人。責任分担を明確にして、他者と協働するスキルも磨く。韓国企業について学びたかったと言う石川沙季さん（商業学科3年）は、全日本空輸と大韓航空を取り上げる。「競争の激しい航空業界においてLCC（ローコストキャリア）との差別化は容易ではない。両国のFSC（フルサービスキャリア）の競争戦略の違いと、その背景を知りたい」というのが理由だ。

一方、戸野部匡皇さん（経営学科3年）は食品業界に興味があり、研究対象を検討中だ。「商品がヒットした理由や企業の設立した目的など、根本を考えることが好き」と話し、これから始まる研究活動に期待を膨らませている。


石川沙季さん（左）と戸野部匡皇さん

多様化する働き方に生きる学び

4年生は個人研究による卒業論文の作成に取りかかる。イノベーションを促す組織の研究や失敗から始まる組織学習などテーマは多岐にわたる。

周准教授は「これからの社会はますます働き方が多様化します。ゼミで学んだマネジメントの知見を生かして、組織で必要とされる社会人になってほしい」と話す。

学生主体の運営を続け今後は学外ともつながる新たな活動を計画中

開講してから今年で5年目。学生主体で運営しながら、ゼミとしての活動方針を模索してきた。これまで



①個別に担当する発表を通じてプレゼンテーション能力を養う　②共同合宿での集合写真
③共同合宿での発表の様子　④テキストの輪読で経営学の専門知識を学ぶ

は内部での活動を充実させることに注力してきたが、昨年の9月に初めて他大学との共同合宿を実施した。周ゼミを含めて3大学のゼミが千葉県佐原市に集まり、2日間にわたって地域活性化の具体案を議論した。

「他大学の学生との共同作業は初めてだったこともあり、ゼミ生は刺激を受けたようで好評でした」と話す周准教授。多角的な視点を得たり、ゼミ生同士の交流を深めたりする効果もあることから、毎年の恒例化を検討している。

もう一つ計画しているのが、韓国での海外インターンシップの実施だ。同准教授は民間のシンクタンクでの実務経験があり、人的交流は今でも続いている。そこで夏季休暇期間を利用して、同シンクタンクの韓国法人で約1カ月の就業体験を企画した。

「ゼミで行う日韓企業の比較研究とも関連して、企業活動の実態を知る上で貴重な体験になります。グローバルな視野を持つためにも役立つはずです」と同准教授は話す。

Kポップやドラマを通じて韓国に関心を持つ学生は多い。韓国とのつながりを生かして経営学を究める周ゼミの今後の活動に注目したい。

COLUMN

商学部経営学科

経営学科では、企業やNPOなどを中心に組織の仕組みとその運営の方法、さらには企業を動かし、変革していくために必要な知識と問題解決能力を育てている。数多くの企業の事例を使い、経営判断の流れを疑似体験したり、アイデアを生み出しやすい仕組みを考えたりする。これらの学びを通じて、経営に必要な「戦略を立て、組織を作り、人を動かす」という論理に裏付けられた実践力を身に付けることができる。



未来を拓け！
各学部
実践授業

文理学部教育学科

特別支援教育の基礎となる実践型授業

知的障害教育論

知的障害のある子どもを対象とした授業のやり方や必要な教材の作成に挑む。知識を得ると同時に、グループで考えて実践することを重視し、既成概念に捉われない視点を養う。



買い物体験に必要な配慮をコンビニを視察して確認

知的障害がある子どもの日常生活をこなす力を伸ばす

「知的障害教育論」は教育学科専門科目の選択科目。特別支援学校の免許取得を目指す学生には必修となる。2年生以上が対象で、前期15回で行われ、現在18人が履修中。担当しているのは教育学科の田中謙教授だ。

子どもは日常的な生活に必要な学習を学校だけでなく、家庭生活の中でも経験して積み重ねていく。それに対して、学校教育の中でより体系的に学習する機会を設けることが望ましいとされる知的障害のある子どもは少なくない。知的障害教育の目的は、知的障害のある子どもが、日常生活をこなす力を伸ばすこと。そのため、教育の内容論とともに方法論も重視している。

授業では二つのテーマを取り上げる。現在は「買い物」をテーマとして、知的障害のある子どもが一人で買い物をできるようになるために必要な経験を得るための授業の構築に取り組んでいる。

例えば「500円以内でお昼ご飯を買う」という課題を設定する場合、子どもたちにどのような経験が有効で、そのために必要な配慮や使う教材はどのようなものが良いかを考えていく。知的障害のある子どもには「お昼ご飯」を具体的にイメージすることが難しい場面があるため、まず弁当やおにぎり、パン、麺類などいろいろな選択ができることを理解させる。数が多すぎると判断できなくなるため、どれだけの情報を提示するかが重要だ。

授業では4人程度の小グループに分かれ、どうしたら買い物の仕方を教える授業ができるかアイデアを出し合い、使用する教材を作成する。

そのためキャンパス内のコンビニを視察し、商品選びやレジの並び方など、子どもたちが問題なく買い物を体験するにはどうしたら良いかを検討する時間も設けている。

学生は買い物という行動を一つ一つの動作に分解して捉え直し、教材などを考える。その際、情報の取捨選択が必要だが、初めて取り組む場合は情報過多になることが多い。

田中教授は「現実に使われている教材は必要最小限の情報で完結しています。自分たちが作った教材と比べて、その違いを学んでほしい。そ



授業は4人程度のグループに分かれて行う



教材の内容を考え、意見を出し合う

のための試行錯誤が、まさに学生自身にとってのアクティブラーニングになります」と話す。

買い物の次は「渋沢栄一」をテーマにする予定だ。

インクルーシブ教育に向かう基礎を養う効果も

この授業では、知的障害のある子どもの特性を理解した上でどのような授業をデザインすれば良いのか、最低限必要な力を身に付けることができる。さらに特別支援学校の免許取得を目指す学生は、3年次の「特別支援教育演習」も履修し、現場での実践を学ぶ。

将来的に知的障害のある子どもも、共生できるインクルーシブ教育に向かっていく。普通校でも、クラスに軽度の知的障害のある子どもがいる可能性もある。

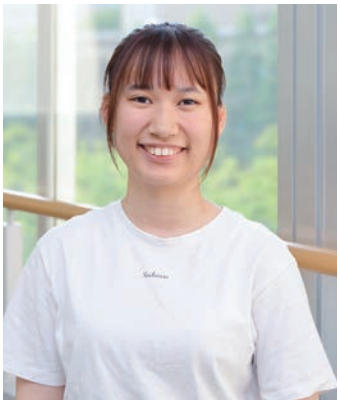
田中教授は「一般の教員免許取得を目指す学生でも将来困らないよう、軽度から重度まで偏らない授業になるようにしています」と話した。

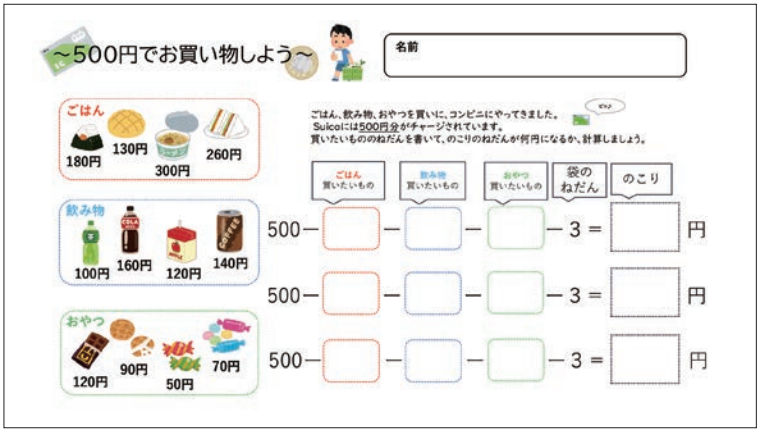
一人一人に寄り添う教育にやりがいを感じる

中学校の体育教員を目指す清水康生さん（体育学科3年）は、昨年の夏に受けた介護の体験授業で初めて特別支援学校を訪れた。「普通校の授業と違い、一人一人に寄り添った授業を行っていることにやりがいを感じました」と言い、特別支援学校の免許取得に挑むことを決めた。伊藤千智さん（教育学科2年）は社会科教員志望。中学生の時に勉強以外の相談に乗ってくれる先生に教員のあるべき姿を感じた。「どんな生徒にも悩みはあり、助けが必要。特別支援教育はその究極だと思い、学びたいと考えました」と話す。

特別支援教育を学ぶ学生は向上心が高く、勉強だけでなく子どもの成長を支えていきたいという意欲に満ちている。知的障害教育論は、より専門的な学びに向かう基礎になる。


清水 康生さん


伊藤 千智さん



実際に学生が授業で作成した教材の案

担当教員から学生への期待

学んだ知識を生かして共生社会の実現に貢献してほしい


田中 謙 教授

最初は知的障害者教育とは普通教育を簡単にしたもの程度の認識だった学生でも、授業を経てその複雑さを理解し、大きく成長します。また、実践を前提とした基礎を養うため、現場に出た時に必要な指導力を身に付けることができます。

大半は特別支援学校の教員を目指していますが、一般の教員や教育関連の企業に就職する学生もいます。社会に出た時に、この授業で学んだ人への配慮や情報の伝え方の工夫を生かせば、インクルーシブな社会づくりにもつながっていくでしょう。

教育に直接関わるか間接的に関わるかを問わず、他の人よりも知識を多く持っていることを自覚して、より良い社会になるよう、力を発揮してほしいと願っています。

教育学科の詳細は
ウェブページを参照

ここにも！

日大のDNA

interview

野村純司 氏

Kiyoshi Nomura

有限会社野村煎豆加工店社長
理工学部卒

ほんのり甘くて、ほどよい塩味が幅広い年代から支持されている野村煎豆加工店（高知市）の「ミレービスケット」。この素朴な味わいのお菓子を地元の高知県のみならず全国区のヒット商品に育て上げたのが、理工学部出身で2代目社長を務める野村純司さんだ。

社長に就任して50年余りが経つが、順風満帆なのはミレービスケットが売れているここ15年間。その前は倒産の危機にひんするなど幾多の苦難が続いた。こうした試練を乗り越えられたのは大学時代に培った経験が大きいという。今も現場で陣頭指揮を執る野村さんに話を聞いた。

―野村煎豆加工店はご実家ですね。

野村煎豆加工店は先代の父親が豆類の加工販売を手掛ける個人商店として大正12年に創業し、豆菓子を主力としながらミレービスケットを昭和35年ごろから手掛け始めました。もともと大手企業が開発した国内生まれのビスケットでしたが、製造中止となり全国の菓子メーカーに加工を呼び掛けていて、それに父親が手を上げたのがきっかけです。

しかし、経営が厳しくなり、いつつぶれてもおかしくない危機的な状況に。弟が会社の存続に奮闘しており、弟に請われて5年間勤めた建設会社を辞めて高知に戻りました。建設会社では原価意識と環境の変化を把握することの大切さを徹底的に叩き込まれました。

―再建に向けてどのような施策を。

まず手掛けたのが、父の時代の「丼勘定」からの脱却です。工場、営業、総務・経理の3部門がそれぞれの役割を担い、アイデアを出し合いながら会社を運営する「三権分立」の体制をつくりました。

「どうすれば消費者が手に取ってくれるのか」「流通業者がたくさん仕入れてくれるには」。各部門が率直に話し合うことで課題が徐々にほぐれていきました。例えば、ミレービスケットの種類やサイズ、パッケージデザインの多さもその成果の一つです。

そしてミレービスケット躍進の大きな契機になったのが、尾崎正直高知県知事（当時）に声を掛けていただいた平成21年の食品見本市「スーパーマーケット・トレードショー」への出展です。ここで火が付き、高知県の代表的なお菓子から全国区のお菓子、さらに海外にも販路が広がり成長していきました。

昭和40年代に年商1億円弱だったのが現在は30億円規模になり、ミレービスケットは売上高の9割近くを占めるまでになりました。販売拡大に伴って工場も複数増設し、現在は来年末の稼働をにらんで第4工場の建設も検討しています。

―ミレービスケットのコラボレーションが増えていますね。

知名度上昇に伴い、他社からのコラボ依頼が多数舞い込んでいます。飲料メーカーによる「ミレービスケットオレ」や、サンリオの「ハローキティ」とのコラボ商品が実現するなど、ミレービスケット自身が独り歩きを始めた感じさえします。

また、CSR活動として高知県警と組んで、振り込め詐欺防止に向けて「振り込め詐欺をミやぶレー」を



“日大応援団の経験は人生の支えになっていると実感しています”

啓発グッズとして展開しています。林真理子理事長にもお声掛けをいただき、昨年の日大の違法薬物追放ウイークには「日本大学オリジナルミレービスケット」を3万個作らせていただきました。



今年3月、林理事長が「日本大学オリジナルミレービスケット」のお礼に高知市の本社を訪れた

―工場が水害に見舞われたこともありました。

昭和45、47年にも浸水被害に遭いましたが、近年で最もひどかったのが平成10年。豪雨によって工場が浸水し、壊滅的な状況になりました。泥まみれになった機械の前でぼうぜんとする私を、従業員たちが励ましてくれました。全員が一丸となり、2カ月後に再開することができました。

―さまざまな逆境を跳ね返してこられた要因は。

現在まで頑張ってこられた根底には、日大応援団の経験が大きいと思っています。「肉体に限界があっても精神には限界がない」という教えのもと、厳しい訓練に耐え抜き、何事にも負けない精神力を養いました。今の時代とはギャップがあるかもしれませんが、この時の経験が人生の支えになっていると実感しています。三島で過ごした教養部時代の製図やお茶の水時代の測量実習も苦労しましたが、楽しい思い出です。



応援団時代の野村さん（前列右から3人目）

―後輩へのメッセージをお願いします。

まずは仲間を大事にすること。一人で考えることには限りがありますが、友人、知人らとの議論、真剣なアドバイスや助言は必ず自分の血肉になります。いい仲間を得ることはそれだけで財産になります。そして困難に直面した時には、それを徹底的に探究すること。こうした経験を積み重ねていくことが人生を豊かにすると思っています。

> “いい仲間を得ることはそれだけで財産になります”



幅広い年代から親しまれる



初代社長の父・重政氏が会社を見守る

のむら・きよし
昭和16年　高知県生まれ
　39年　本学理工学部土木工学科卒、森本組入社
　43年　有限会社野村煎豆加工店入社
　47年　社長就任



桜門ビル（戦後）

学び舎の記憶

友人との交流、恩師の授業、課外活動など、大学時代の思い出はたくさんあるが、
自らが学んだ校舎の記憶も欠かせない要素といえるだろう。
ここでは、すでに解体されてしまった本学の校舎・建物を紹介していく。

第9回

桜門ビル

かつて、三崎町の法学部の隣に「桜門ビル」と名付けられた、通信教育部をはじめとする組織・団体が入っていた建物がありました。今回は、この桜門ビルについて紹介します。

昭和11（1936）年ごろより、日本大学では、3年後の創立五十周年を見据えて、校友会館の建設を計画していました。『日本大学新聞』では学校関係者・校友らがさかんに校友会館の必要性を訴えていました。

このような折、翌12年に、本学は三崎町校舎（法学部本館）と道路を挟んで隣接していた「宇野ビル」を取得します。元の所有者は宇野共次氏という著述や出版を生業としていた人物で、このビルには元々は満蒙学校（満州・内モンゴル移住者への知識を教授する学校）や喫茶店が入っていました。

取得した当初は「宇野ビル」の名前のままで運用していましたが、2年ほどが経過した昭和14年6月にビル名を「桜門ビル」と改称します。同じころ、五十周年記念事業の一つとされた校友会館の建設はこの桜門ビルをもって充てることとなりました。昭和14年10月の時点では、1階に出版部、2階に外事部・校友会・日本大学新聞社、3・4階に自然科学研究室が入っていました。

昭和26年2月、通信教育部が当時三崎町にあった大学本部3・4階から桜門ビル1・2・4階に移転しました。以後長らく桜門ビルは、通信教育部や校友会、学生サークル等の建物として利用され、親しまれました。

一方で、戦中・戦後は各地で建物が不足していたことから、桜門ビルの一部は、日本加工紙協会、東京加工紙協会、東京ライフ社、ジープ社、四州社といった、製紙業や出版業に関するいくつかの会社に貸し出されたようです。これらの会社からは、昭和20年代の早いうちに、漸次本学に返還されました。特筆すべきは、戦後、私学振興のため結成された各種団体（日本私学団体総連合会、日本私立短期大学協会、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、日本私立幼稚園連合会、東京私立初等学校協会など）も桜門ビルの一角に事務所を置いていたことです。戦後間もなくから昭和33年に私学会館が設置されるまでの約10年の間、桜門ビルは、戦後日本における私学の振興・発展が議論され、取りまとめられた場でもあったのです。

また、桜門ビルの1階には学生向けの店舗が入っていました。戦前は



桜門ビル正面



通信教育部事務室



法学部図書館側から見た桜門ビル

望月洋服店の売店として、制服、制帽、教練服、雑貨、学用品などを取り扱っていましたが、戦争の激化によりやむなく休業となります。同店は戦後に「日照堂」と名を改めて、教科書や文房具などを取り扱う店として再出発し、本学学生たちに親しまれました。ちなみに日照堂は、本学の古橋廣之進らが出場したヘルシンキオリンピックの日本選手団の公式服装調製を日本体育協会から依頼され、その後も日本のオリンピックやユニバーシアードの公式ブレザーのデザイン・調製に関わるなど、知る人ぞ知るお店でもありました。

平成14（2002）年、老朽化のため桜門ビルは取り壊され、翌年跡地に通信教育部の新たな校舎が建設されました。なお、通信教育部は平成26年に市ヶ谷の日本大学本部隣接地に新築された校舎へ移転しました。現在、かつて桜門ビルがあった場所に建てられている校舎は、法学部13号館（法科大学院）として利用されています。

（広報課　上野平）

【参考文献】
『日本大学百年史』第2巻（平成12年）、第3巻（平成14年）
『日本大学通信教育部　創設75年史』（日本大学通信教育部創設75年史刊行委員会、令和6年）
鈴木理生『明治生まれの町神田三崎町』（青蛙房、昭和53年）


桜門ビル内階段（平成14年）


桜門ビル周辺航空写真（昭和20～30年代）


法学部三崎町校舎（手前）と桜門ビル（奥）


解体直前の桜門ビル（平成14年）



法学部13号館（令和6年）

桜門ビル

所 在 地：東京都千代田区神田三崎町2－2－3
（旧 東京都千代田区神田三崎町2－34－1）
現・法学部13号館所在地

取　　得：昭和12年
4階建鉄筋コンクリート造
延床面積　1455.61㎡

解　　体：平成14年



明日の覇者へ
日大アスリートの挑戦
第10回

【野球部】

野球部は、東都大学野球リーグで1部優勝23回の実績を誇る。直近では令和5年春季・秋季リーグともに準優勝と好成績を挙げた。創部100年を迎えた今年こそ、全国大会で優勝を果たし、日本一になるという目標に向けて、士気は一層高まっている。

創部100年の記念の年に全力で日本一を掴む

自主性を重んじ、凡事徹底 今年のスローガンは「掴」

東都大学野球リーグは全国各地の大学野球リーグの中でも最激戦区と言われ、順位の入れ替えが激しい。本学野球部は平成29年以来2部に在籍していたが、令和3年、片岡昭吾監督（平成12年経済学部卒）の就任とともに1部復帰を果たした。

「野球に必勝の策はない。部訓である凡事徹底を重視し、当たり前のことを当たり前にやるだけ」と話す同監督。どんなに技術があっても、学生野球の本分は学業優先。授業に出て単位を取り、野球を通じて社会に通用する常識を身に付けさせることが方針だ。

「1年生から4年生まで、同じ条件



片岡 昭吾 監督

平日の自主練と土曜の全体練習で翌週の試合に備える

野球部の練習グラウンドは生産工学部の実籾キャンパス内にあり、寮も徒歩5分の距離。平日は午前中の全体練習と授業後の練習に分かれての活動。春季・秋季リーグ開催中は週2回程度、平日に試合が行われるため、土曜日は全部員がそろう全体練習とし、翌週の試合に向けた調整を行う。午前中に紅白戦を実施し、午後は夕方まで連携プレーの確認。全体練習終了後は各自の課題に従って自主練に励んでいる。



土曜日の午前中は紅白試合



それぞれが自身の課題を把握している



午後からは連携プレーの確認



で野球ができること」を掲げ、旧弊な上下関係をなくして、一人一人が自主性を持って伸び伸びと練習に打ち込める環境をつくった。

創部100年に当たる今年、部員全員で決めたスローガンは「掴(つか)む」。

「今こうして野球ができるのは先輩たちのおかげ。感謝の気持ちとともに、記念の年に日本一を掴もうという意欲に満ちている」と期待する。

全国から集まった優秀な選手が一丸となって勝利を目指す

現在、部員は約120人。甲子園出場経験もある強豪校から進学し、プロ野球、社会人野球を目指す部員が大半だ。今年は2人の選手がドラフト候補に挙がっている。その一人、市川祐投手（法学部4年）は、昨年春季の最優秀投手賞を受賞。

「日々の地道な積み重ね、継続こそが力。今年の抱負は、自分が投げる試合は全て勝つこと」と、言葉に力が入る。

同じく谷端将伍内野手（経済学部4年）は、副将としてチームを牽引(けんいん)。昨年は春季・秋季リーグ連続で首位打者を獲得した。

「上下の隔たりなく一丸となれるのが我々の強み。全員、自分が主役という意識で勝ちにいく」と話す。

主将としてチームをまとめるのは南條碧斗捕手（危機管理学部4年）。プロ野球、社会人野球を視野に入れ、一日も長く野球を続けたいという気持ちは誰にも負けない。

「部員はみんな、日本一にこだわって練習を続けてきた。自分たち4年生が引っ張って、今年こそ夢を叶える」と意気込みを語った。



昨年の春季・秋季首位打者獲得
副将 谷端 将伍 内野手



昨年春季、最優秀投手賞を受賞
副将 市川 祐 投手



チームをまとめ日本一を目指す
主将 南條 碧斗 捕手

こと

「本物を見ること」



日本大学山形高等学校
教諭（地歴社会）
野口 敏広
本学文理学部地理学科卒。
平成14年より山形高等学校に勤務。
現在、教務を担当（主任）。

本校の東には奥羽山脈を構成する蔵王連峰が、西には出羽山地が広がっており、特に晴れた日などは月山の雄大な姿を眺めることができる。そして本校は、蔵王連峰を源流とする馬見ヶ崎川によって形成された扇状地上に位置している。また、山形市は山形城（霞城）から発達した城下町であり、町名や道路など現在も市内各地にその名残を見ることができる。このように自然的にも文化的にも恵まれた環境を、授業に利用しない手はない。

私が地理に興味・関心を持ったきっかけを考えてみると、小学校の授業と家族旅行にあったと思う。各都道府県の名産品について学習する社会の授業で、山梨がブドウの名産地であることを習ったが、その時は何か特別な印象を持ったわけではなかったと思う。しかし、家族で山梨に旅行に行った時、目の前に広がるブドウ畑を見て、学校で勉強した内容と同じ光景が広がっていることに感動し、学習した内容を自らの目で見ることができる楽しさを知った。その後、中学・高校・大学と地理を学び続け、現在に至っている。

授業で扇状地を学習する時には、必ず山形の話をする。「千歳山」「山形県庁」など、身近な地名を挙げながら授業を進めていく。天気がいいときは校舎の屋上に生徒たちを連れていき、地形の様子を観察させる。「あの辺が扇頂かな」「意外と傾斜があるな」などと生徒からの声が聞こえてくる。このような反応があると、私の狙いが生徒に伝わったと感じ、うれしくなる。授業で学んだ内容をすぐに自分の目で確かめられるというのは、とてもぜいたくなことなのかもしれない。

教育環境におけるＩＣＴ化はここ数年で急速に進んでいる。タブレット端末を利用し画像や動画を活用することで、世界中の地理的事象を視覚的に捉えるのが容易になった。その場所に行かなくても行ったような、体験していなくても体験したような気分になる機会が増えたのは、ＩＣＴ化の恩恵である。しかし、このような時代だからこそ、自分の五感を最大限に生かし、本物を見ることを大切にしていきたい。

先生からのひと

「日大・付属の輪」



土浦日本大学中等教育学校
教諭（地歴社会・公民）
網野 秀太郎
本学法学部法律学科卒。
平成28年より土浦日本大学中等教育学校に勤務。

気が付けば人生の約3分の2を日大で過ごしてきた。約20年前、付属中学校に入学した私がまさか日大付属校の教員になるとは、当時は夢にも思わなかっただろう。現在、私の勤務校は母校ではないが、教壇に立ち始めて約10年間、いろいろな場面で数多くの日大や付属校、母校の関係者と関わってきた。水泳部顧問として、関東や全国規模の大会に参加することがあれば、日大・付属の名前を耳にしないことはない。また、クラス担任をしている生徒の保護者には日大・付属に何かしらのゆかりを持つ方が必ずいて、母校話で盛り上がる。付属校に勤めているのだから当然のことかもしれないが、私は自身が日大を卒業して今でもずっと日大・付属の輪の中にいるのだということを日々実感していて、改めて規模のすごさとそのつながりを強く感じている。正直、このような輪は日大をおいて他にない。

そんな輪の中で、最近私が抱いている夢がある。本校では昨年度から総合的な学習・探究の時間で「模擬国連」を実践している。模擬国連では実際の国連総会を模倣し、さまざまな国際問題を議論していく。国際問題の理解には社会や理科の力が必要となり、また大量の資料読解や決議案作成、交渉力には数学力、国語力や英語力が必要となってくる。そのため「学びのフルコース」とも呼ばれ、現代社会に求められているものを与えてくれる。ただ、そんな模擬国連も会議に参加してくれる団体がいないと始まらず、他校では本大会に向けて、有力な学校が主催するプレ会議に出場して、議論の経験を重ねている。

近い将来、私はこれを日大会議として開催したい。日大や付属、また卒業生などの力が結集すれば、素晴らしい会議が実現することはもちろん、多くのつながりをつくることができ、新たな輪を広げることができる。そんなことを可能にしてくれるのも「日大・付属の輪」の力だと思っている。そんな私の野望に心同じくしてくれる方がいらっしゃればという思いで、このエッセーを締めくくりたい。

がんばる

ダイバーシティ推進の ロゴマークで最優秀賞受賞

日本大学藤沢高等学校 田金 優希さん

たがね・ゆうき　3年生



本学のダイバーシティ推進活動を象徴するロゴマークに、田金優希さんの作品が選ばれた。

「大学生も含めた応募がある中で最優秀賞を受賞でき、とてもうれしい」と話す田金さん。デザイン関連の賞に応募することも受賞することも初めての体験だけに、大変驚いたという。

昨年、ダイバーシティ推進委員会は学生と付属高校生を対象にデザイン案を募り、9月末までに36点の応募があった。

最初に同委員会の投票で上位5点を選出し、学生、生徒、教職員によるウェブ投票（7425人）を実施。田金さんの作品は2342票を獲得して最優秀賞に、それに次ぐ2作品を優秀賞に決定した。

今年3月21日に日本大学会館で表彰式が開かれ、受賞者には賞状と副賞が授与された。受賞作品は、本学のホームページや各種広報などに活用される。

夏休みの課題がきっかけ

応募のきっかけは昨年の夏休みの課題だった。作文や読書感想文のコンクールなど、自由選択の課題の中に今回のロゴマーク募集が入っていた。

「必修科目の課題が早く終わったため、新しいことに挑戦してみようと考えて選んだ」

高校生になり現在まで、江の島海岸のゴミ拾いのボランティアに参加を続けるなど、SDGsをはじめとする地球規模の社会問題には関心が高かった。

「応募するに当たり、ダイバーシティという言葉の意味を改めて調べ、LGBTQや宗教など多様性への理解が深まり、有意義だった」とも話す。

パソコンで試行錯誤

大まかなデザインを決めるのに、時間はかからなかったそう。

「ブルーの外枠は、海に囲まれた日本の環境や国際性を表現している。多様性を象徴するレインボーカラーを日大のNの形にして、分かりやすくするために英文も入れた」

制作にはパソコンの「ペイント」を使ったが、これも初めてのこと。

「虹の色を綺麗に重ねるのは苦労した」と言う。画面上で作ったデザインをプリントして線の太さや色の濃さを比べながら、バランスを決めた。

「マニュアルを調べながら作業したが、パソコンは好きなので楽しかった」と笑う。

IT関連の技術者目指す

小学校から中学校まで卓球とトランポリンを続け、特にトランポリンは小学6年生の時に県大会5位になるなど文武両道。高校からはバドミントンを始めた。

現在、理系コースに所属。数学が好きで、最近は化学にも興味を持っている。本学理工学部に進み、IT関連の技術者になることが将来の目標だ。

「大学ではITだけでなくいろいろな分野を学んで知識を広げたい。このロゴマークを見て、一人でも多くの人がダイバーシティに関心を持ってくれたらいいですね」と期待を語った。

付属生

“創部”3年目の快挙
アナウンス通じて充実の日々

千葉日本大学第一高等学校 望月玲那さん

もちづき・れいな　3年生

昨年11月の千葉県高等学校文化連盟放送コンテストのアナウンス部門で優秀賞を受賞し、今年7月に香川県で開催される全国高等学校総合文化祭（総文祭）出場を決めた。総文祭の放送カテゴリーは、NHK杯全国放送コンテストと並ぶ放送に携わる全国の高校生にとって憧れの舞台だ。

望月玲那さんの所属は生徒会傘下の放送委員会。部として独立しておらず、できてまだ3年目。歴史も実績もない放送委員会の快挙に学内も沸いている。

厳しい評価に刺激を受ける

「あなたはとてもいい声をしている」

放送委員会に入るきっかけは高校1年時の担任の誘い。もともと話すことが好きで、文科系の部活で活躍したいと考えていた。

活動当初はできたばかりということもあって人も少なく、先生、先輩たちと手探りで活動を進めてきた。現在は3年生となりリーダー（委員長）として、下級生たちを引っ張っている。

「今回賞をいただいたのも顧問の先生方の的確な指導、先輩たちのアドバイスで基盤を作れたからこそ。自分一人の力ではとても取れなかった」と話す。

活動を通じて刺激を受けたのは、他校放送部のレベルの高さ。大会の予選などでこうしたライバルたちと接する場面があると、圧倒されてきたという。「話すテンポ、言い回しなど全ての面でかなわなかった」と振り返る。





そして、もう一つの刺激が大会の審査員から講評用紙を通じて下される厳しい評価。「自分のアナウンスに対し、審査員ははっきりと意見してくれる。もともと負けず嫌いな性格なので、指摘いただいた意見を自分の中に落とし込んで、次こそはという気持ちで努力を積み重ねることができた」

自分の言葉で表現する大切さを実感

千葉大会のアナウンス部門のテーマは、郷土の話題を全国の高校生に伝える自作原稿。1分30秒以内で伝えきることが求められる。

望月さんがテーマに選んだのが「Ｑｉｂａｌｌ（きぼーる）」と呼ばれる公共施設と商業施設が入る官民複合施設。千葉市のシンボル的な建物で、子育て支援と生活・産業の情報発信の拠点ともなっている。

望月さんは同施設を訪れて担当者に取材し、官と民が協力して作り上げた思いを自分の言葉で表現した。審査員の評価は、アナウンス技術よりも内容に対する評価が高かったという。

「実感したのは、アナウンスは自分が理解した情報を伝えることが大切だということ。取材の内容を削って削って1分30秒の枠に入れる作業は大変でしたが、とても充実した時間でした」

目標は声の仕事もできるマルチキャリア

将来の進路は、本学法学部への進学を考えながらナレーターやアナウンサーも視野に入れるというマルチキャリアを志向する。「難関ですけれど公認会計士になりたいですし、その上で声の仕事にもつながればとてもうれしい」と笑顔で話した。

付属校ニュース

北から南から

N

S

教育活動

櫻丘高 英字新聞完成！

1年生が総合的な探究の時間に作成してきた英字新聞が、2月に完成した。

グローバル教育×ダイバーシティの一環として取り組んでおり、身近な地域における社会問題に対してグループごとに調査を行い、解決策を提案し、クラス内で発表を行った。どのグループも工夫を凝らした内容でバラエティーに富んだ新聞となった。



藤沢中・高 ピンクシャツデーの活動

2月25日、本校では「ピンクシャツデー」を広める活動を行った。ピンクシャツデーは、いじめのない社会を目指す国際的な活動で、多くの生徒たちがこの趣旨に賛同した。

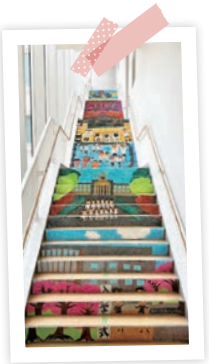
この取り組みを通して、「いじめ反対」のメッセージを発信し、思いやりや多様性の大切さについて改めて考える良い機会となった。



藤沢小 鉄砲階段を彩る階段アート

毎年6年生の卒業が近づくと、在校生たちが1年間の学校生活を絵に表わし、校舎1階から3階をつなぐ鉄砲階段を彩る。入学式から始まり、遠足、運動会、文化祭、スキー教室などの思い出を下描きから色付けまで、各クラスが担当し、個性溢れる作品が並ぶ。

6年生は、階段を歩くたびに6年間の思い出をよみがえらせ、「残り少ない学校生活を大切に過ごそう」という気持ちをもって卒業式を迎える。下級生からの最高のプレゼントだ。



幼稚園 子ども同士の関わり

幼稚園に入園したばかりの子どもたちを支えるのは先生ばかりではない。年少組の子どもたちにとってより身近な存在となるのが、年中・年長組の子どもたちだ。

園での生活の仕方を教えるだけでなく、一緒に過ごし遊ぶことが双方にとって刺激となり、日々の関わりでその姿そのものが憧れとなり、成長につながっていく。

子ども同士の関わりの可能性は計り知れない。



日大一中 恒久平和への願い表す

昨年12月、東京都主催の「『東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑』花壇デザイン画募集」において、1年生（当時）の貝塚聖菜さんが優秀賞、塚本咲良さんが審査員特別賞を受賞した。応募総数903点の中から選ばれた快挙で、美術の授業での取り組みが実を結んだ。

本校至近の都立横網町公園内にあるこの碑には、空襲の犠牲となった8万人以上の名簿が収められており、貝塚さんの作品は、令和7年度の夏の花壇となり、哀悼の意と恒久平和への願いを表す予定だ。



千葉日大一小 40周年記念し大規模工事

今年創立40周年を記念して「やさしい学び舎」をコンセプトに、校舎の大規模リニューアル工事を行っている。7月完成、9月使用開始に向け、工事は急ピッチで進んでいる。

新校舎は開放的な教室と、廊下の間の壁は引き戸で開閉でき、学習内容に応じて教室空間をさらに広くできる。また、教室には最新のICT設備を導入し、双方向型の授業や協働学習に対応している。

11月12日には、記念式典を開催予定だ。



日大二中・高
歓迎公演で猛アピール

創立100周年まで1年余りとなった本学園は、4月に中学校240人、高校451人の新入生を迎え、日々活気に満ち溢れている。

ダンス、チアダンス、吹奏楽といった学園の人気部が放課後、次々に歓迎公演を実施して新入生に猛アピール。3月に全国大会出場を果たしたダンス部の公演は、軽快な音楽に合わせた踊りと趣向を凝らした演出で、新入生約300人を集めて魅了した。



岩瀬日大高
新聞切り抜き作品で入賞

東京新聞主催「第21回新聞切り抜き作品コンクール」で、高校生の部791作品の中から、1年生(当時)の大吉眞侑さんの「民主主義を守るために」が最優秀賞を、1年生(当時)の宮田桃花さんの「変える～男女差別のない誰もが輝ける社会へ～」が優秀賞に選ばれた。

それぞれ「若者の政治参加」「ジェンダー平等」といったテーマを自ら設定し、膨大な新聞の中から関連する記事を模造紙に整理し、自分なりの分析をまとめ、レイアウトして作品を完成させた。



土浦日大中等
研究で茨城県の頂点に！

昨年度の茨城県児童生徒科学研究作品展において、4年生(当時)の太田ことまさんが最優秀賞に当たる県知事賞を受賞した。「線虫の記憶のしくみを探る」というテーマで継続して実験を行ってきた成果であり、昨年11月29日に県庁で行われた表彰式では、入賞者を代表して研究内容を発表した。県知事賞の受賞は本校としては3年連続の快挙。今後も活発に研究活動を行い、さらに素晴らしい研究成果を挙げていくことを期待している。



佐野日大中等
総合的な探究最終発表会

3月12日に栃木県のプラザ40を会場に、「総合的な探究の時間」最終発表会が開催された。日本大学から多くの教員を招き、盛大な発表会となった。

1年生のテーマは「今はまだない、世の中をより良くするアイデア(街・建物)を提案しよう!」。2年生は「企業と地域8課題をテーマに課題解決に取り組む」。3～5年生は、それぞれ興味・関心があるテーマを選んだ。この1年間、日本大学の教員からアドバイスを受けながら探究活動を進めてきた。最終選考会では、生徒、保護者、教員による投票で選ばれた代表10グループが堂々と発表を行った。



長野日大高
「First IB CP School in Japan～IBDP・CPの学びがスタート」

令和7年3月に国内ではじめて、国際バカロレア機構からCP(キャリア関連プログラム)の認定を受け、IB World Schoolの一員となった。また昨年11月にはDP(ディプロマ・プログラム)の認定も受けた。

DP・CP1期生の生徒たちは、今年4月から学問探究の旅をスタートさせた。国内外のIB World Schoolや海外大学との交流は異文化理解につながるものと考えられる。ミライを切り開くリーダーが長野の地から誕生する日も近そうだ。



長野日大小
PYPエキシビション開催

本校では、6年時にIB(国際バカロレア)のPYPプログラムの総まとめとして「自分らしさ」を再発見するための個人探究を実施している。

メンターの教員と共に重要概念に基づいた問いを立て、時に校外に飛び出してコミュニティーとつながり、さまざまな情報を得ながら考えを深めていく児童たちは、最後に個人ブースによる成果発表も実施。多くのゲストを前に、一人一人が自信を持って自らの言葉でアイデアを語る姿は、まぶしく輝いていた。



長野日大幼稚園
理事長、学長迎え開園式

あかしや幼稚園が令和7年4月より、日本大学の準付属校「長野日本大学幼稚園」となった。

3月29日には開園式を行い、日

本大学の林真理子理事長と大貫進一郎学長を来賓として迎えた。

林理事長と大貫学長は園児向けのあいさつに加え、園児と一緒にダンスにも参加し、「園児ファースト」の開園式となった。その後、二人は保護者とも交流。保護者一人一人との対話セッションにも参加した。

開園式を通じて、日本大学の準付属校として、地域に信頼される園運営を行っていく気持ちがさらに高まるイベントとなった。

札幌日大高 〝北方領土を考える〟高校生弁論大会で優秀賞

弁論部の橋爪駿一郎さん（2年＝当時）が1月に行われた「第39回〝北方領土を考える〟高校生弁論大会」で優秀賞を受賞し、その副賞として3月に石破茂内閣総理大臣を表敬訪問した。

この大会は青少年に北方領土問題や返還要求運動に関心を持ってもらい、国民世論のより一層の高揚を図るため、道内の高校生を対象とした弁論大会。石破総理との懇談の際に北方領土について自分の考えを述べ、石破総理から激励を受けた。



出典:政府広報オンライン「「北方領土を考える」高校生弁論大会入賞者による表敬―令和7年3月12日」を加工して作成

目黒日大高 商店街活性化へミライ会議

生徒会が昨年度から地域活動として「目黒区ミライ会議」に参加している。

目黒区ミライ会議とは、区内の商店街活性化を目指し、次世代を担う若者の育成に取り組む地域連携プロジェクトである。生徒会役員の松岡凛空さん（3年）は「目黒日大の生徒会役員として、商店街の皆さんと一緒に新たな価値を創造しようと日々活動しています。また、今後はミライ会議で得た新たな発想や経験を全校生徒に還元していきます」と話している。



部活動ほか

日大中・高 ラクロス部が全国優勝！

3月28日から3日間、神奈川県の三浦潮風スポーツ公園で行われた第16回全国中学校高等学校女子ラクロス選手権大会で、ラクロス部AQUAが6年ぶりに日本一に輝いた。

決勝では1点を争う一進一退の試合展開の中、本校のゴーリーが相手のシュートをセーブし、自分たちに流れを引き寄せたことが大きな勝因となった。4月から始まる春季大会に勝利し、秋季大会・全国大会と合わせて3冠を達成することが今後の目標としている。



鶴ヶ丘高 サイバー防犯に感謝状

昨年7月、情報部員46名が中心となり活動するサイバー防犯ボランティアに対して、警視庁高井戸警察署より感謝状が贈られた。

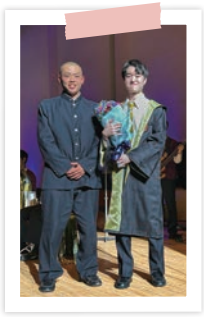
サイバーパトロールは、日頃の部活動で培われたノウハウを、社会貢献につなげられる絶好の取り組み。警視庁が実施したサイバーセキュリティー講座を受講することで、情報を取捨選択することの大切さや、ネットリテラシーへの理解もこれまで以上に深まった。



豊山高 定期演奏会でエール交換も

3月26日、東京都の板橋区立文化会館で、吹奏楽部の定期演奏会が開催された。

当日は保護者や生徒が多く訪れ、会場内は大いに盛り上がった。プログラムの最後に野球部のキャプテンから吹奏楽部の部長に花束が贈呈された。これは夏の甲子園予選を全力で応援してくれたお礼と、互いに次年度も頑張ろうという両者のエール交換も兼ねたもので、定期演奏会の恒例行事となっている。



豊山女子高 ドローン部の研究結果発表

ドローン部は3月12日、ブルーイノベーションと共同で板橋区役所内で研究結果発表会を開いた。本校はアントレプレナーシップ教育の一環として、板橋区の課題をSDGsの視点からドローンで解決する取り組みを行っている。

2年生は、買い物時の負担軽減を目的としたドローン配送を提案する「物流チーム」と、街中における万引き犯等を追跡するためにドローンを利用する「スマトラチーム」に分かれそれぞれの研究成果を発表した。



三島高
昆虫の面白さに引き込まれて

山﨑自然科学教育振興会が主催する第41回山﨑賞において、生物部2年生(当時)・齋藤大輝さんの研究が最優秀賞を受賞した。

研究テーマは、「クワガタムシの活動開始と相同性　休眠の意義」。クワガタムシは休眠により集団の成長速度を合わせ、活動開始時期を調整しているのではないかと仮説を立て、検証した。

今回の研究を通して課題が見つかり「今後も研究を継続していきたい」と意欲的だ。



明誠高
全国大会でダンス部2連覇

4月19日に東京都の両国国技館で行われたマイナビHIGH SCHOOL DANCE COMPETITION 2025 FINALのLarge部門で、3年生部員全員によるチームAgate(アゲート)が優勝した。

大会では、全国各地の予選を勝ち上がった23チームが演技し、上位3校で決勝が行われた。昨年に引き続き本校が優勝を勝ち取り、大会2連覇を果たした。



山形高
ジャンプでインターハイ優勝！

1月に北海道で行われた第74回全国高等学校スキー大会(インターハイ)で、男子スペシャルジャンプに出場した布施飛雄真さん(2年＝当時)が、優勝を果たした。前年の同大会での5位から、一気に頂点へ登り詰めた。

布施さんは「飛びすぎると怖いけれど、飛んでいるときの感覚は心地よい」と競技の魅力を話す。「大人の選手とも互角に戦えるよう力を磨き、勝つことを目指す」と、最高学年として臨む競技シーズンを見据え、静かに闘志を燃やしている。一層の活躍に期待したい。


写真提供／山形新聞社

習志野高
ハーフタイムショー出演

2月2日、千葉県のららアリーナ東京ベイで開催されたプロバスケットボール「千葉ジェッツ対横浜ビー・コルセアーズ」のハーフタイムショーで、チアリーダー部22人が演技を披露した。創部以来初の観客1万人を超えるビッグステージでの演技は、非常に貴重な瞬間となった。

この経験を経て、部員たちの笑顔はより一層輝きを増すことだろう。



東北高
29年ぶりに記録更新！

4月26、27日に福島県の郡山ヒロセ開成山陸上競技場で、第65回県南春季陸上競技大会兼第44回公認記録会が行われた。3年生の小針星砂さんが男子100メートルに出場し、10秒40のタイムで29年ぶりに県高校新記録を更新した。また小針さんは4×100メートルリレーにも出場し、40秒67で県高校新記録を樹立した。

小針さんの次の目標はインターハイ。さらなる活躍を期待したい。

日大一高
伝統をつなぐ弁論部

昨年11月に行われた第53回東京私学高等学校弁論大会での実績が評価され、弁論部が令和7年度全国高等学校総合文化祭弁論の部の東京都代表に選ばれた。今春卒業した先輩が残してくれた大きな贈り物だ。伝統をつなぐ大役を担うのは、3年生の江頭達也さん。食品ロスと地球全体の環境対策を結びつけたテーマは、卒業した先輩も取り組んでいたものだ。

「さらに練習が必要だ」と顧問の漆原郁夫教諭は話す。7月に香川県で行われる本番では、先輩の思いと共に、上位入賞を目指す。



千葉日大一高
スキー大会で活躍

2年生(当時)の三賀山嗣穏さんが、千葉県高等学校スキー大会個人競技で1位となり、関東大会に出場。SL(スラローム)で9位に入賞した。全国大会、国民スポーツ大会、全国高校選抜大会にも出場し、全国の猛者たちと勝負することができた。3月末の新人戦でも千葉県男子SLで1位を獲得。



現在、スキークロスにも挑戦中だ。三賀山さんは「来シーズンは記録をもっと伸ばしていきたい」と話しており、今後の活躍が楽しみだ。

日大三高
交通安全イベントに協力

吹奏楽部は3月20日に、東京都の南町田グランベリーパークで行われた町田市の交通安全イベントに参加した。町田警察署からの依頼を受け、演奏でイベントを盛り上げた。

当日は、一日署長として登場したスヌーピーとコラボレーション。多くの観客の前で演奏を披露した。同部は「今回の取り組みが少しでも交通安全の啓発に貢献できたとしたら光栄です」と振り返った。

吹奏楽部は地域での活動を大切に考えており、普段から町田市内の町内会のパレードに参加するなど、交流を深めている。



大垣日大高
サッカー部55年ぶり新人V

岐阜県高等学校サッカー新人大会決勝が、2月2日に長良川球技メドウで行われ、県立長良高校に1―0で勝利し、1970年度大会以来となる2度目の優勝を果たした。

高い組織力と粘り強い守備を武器とし、初戦から決勝まで無失点での優勝。現在、岐阜県リーグ1部でも上位に位置しており、岐阜県リーグ1部優勝・全国高等学校総合体育大会(インターハイ)出場・全国高等学校選手権大会出場を目標に掲げ、日々全力で取り組んでいる。



土浦日大高
文化部の活動成果を披露

3月29、30日に茨城県のクラフトシビックホール土浦で文化部総合発表会を開催し、音楽部、演劇部、放送部、ストリートダンス同好会がステージ発表を行った。

文化部などが参加できる合同イベントとして企画され、文化部の活動報告や発表の場を提供することで、文化部の活動をさらに活性化させることを目的に実施。文化部の日頃の活動成果を存分に披露できた素晴らしい会となり、生徒たちの努力が形となった印象的なイベントとなった。



宮崎日大中・高
吹奏楽部が春を奏でる

4月20日に開催されたみやざき国際ストリート音楽祭2025に、中高吹奏楽部45人が出演した。

市内各地に設けられた特設ステージで、吹奏楽部は地域を盛り上げる演奏を披露。マーチ・ブルースプリングなど4曲を奏で、笑顔が広がる春の音楽祭となった。



佐野日大高
競泳個人3種目でメダル

3月に東京都江東区の東京アクアティクスセンターで行われた第47回全国JOCジュニアオリンピックカップ春季水泳競技大会で、後藤結愛さん(2年=当時)が女子50メートルバタフライで1位、女子100メートルバタフライで3位、女子50メートル自由形でも3位と三つのメダルを獲得した。

後藤さんは日本高等学校選手権大会(インターハイ)100メートルバタフライでも3位に輝くなど、目覚ましい活躍を見せている。



長崎日大高
陸上競技の全国大会で活躍

2月1日に大阪城ホールで行われた2025日本室内陸上競技大阪大会のU18女子60メートルYH(ヤングハードル)に、吉永優衣さん(1年=当時)が出場した。

ハイレベルな本大会で、吉永さんは予選を8秒71で組1着通過し、決勝では8秒67で4位に入賞した。今シーズン初戦で課題も多い中、しっかりと結果を残すことができた。



本学教員・校友・関係者の著作や、本学にまつわる書籍などを紹介します

Book



推しはまだ生きているか



人間 六度　著
本学芸術学部文芸学科卒

集英社　2200円(税込)

第39回日大文芸賞優秀賞受賞者。本書はディストピア都市を舞台に、それでも生きていく人間の葛藤と希望を描いたSF短編集。表題作や「サステナート314」など全5編を収録。

インフラメンテナンス大変革
老朽化の危機を救う建設ＤＸ



岩城 一郎ほか　編著
本学工学部土木工学科教授

日経ＢＰ　3850円(税込)

劣化が進行するインフラのメンテナンスについて既存の概念や方法論をリセットし、変革に向けた社会実装プロジェクトの動きを取りまとめた。参画する産官学の多様なメンバーが執筆している。

ヌーヴェル・ヴァーグ
世界の映画を変えた革命



古賀 太　著
本学芸術学部映画学科教授

集英社　1177円(税込)

1950年代末のフランスで生起した映画の革新運動「ヌーヴェル・ヴァーグ(NV)」について、国境や時代を超えた広がりとその担い手を解説。NVの精神に満ちた約800本を紹介している。(P6に関連記事)

歴史学の扉
歴史を学ぶということ



日本大学文理学部史学科　編著

山川出版社　1980円(税込)

これから歴史を学んでいこうとする人々に対し、その学びの最初の一歩になるような話を届ける意図から大学教員たちが執筆。専門家の論文にならないよう初学者でも平易に理解できるように工夫した。

編集後記

▽医学部の創設１００年という記念すべき節目に焦点を当てました。歴代の学生や教職員が築いた歴史をご紹介するとともに、医学部の今にもスポットを当てています。特集「日本文化の海外発信」では、４名に取材協力いただきました。文化交流は経済活動にも大きく影響します。世界がより身近になる中で、日本固有の文化がいかに海外で受け入れられているかについて、映画、観光、地場産業、そして日本酒をテーマに、教員や卒業生にお話を伺いました。

▽「ここにも！日大のＤＮＡ」で、５月中旬に理工学部卒業生が営む高知県の「野村煎豆加工店」を訪問しました。看板商品のミレービスケットは、ほんのり甘く、食べ始めると手が止まらなくなるおいしさです。

高知竜馬空港から20分ほどタクシーに乗り会社に到着。車から降りると、ふわっと甘い香りに包まれ、取材に向けた緊張がほどけていきました。野村純司社長には、学生時代のお話から新卒で勤められた会社、家業に入られてから現在に至るまでのお話を伺い、取材時間があっという間に過ぎていきました。朗らかな笑顔が魅力的な方で、また「人」を大切にするお人柄に心を打たれました。

インタビューを終え、写真撮影のため社内を散策した際に「林さんに書いてもらいました」と、林真理子理事長のサインが書かれた社屋の壁面をご紹介いただきました。昨秋の「違法薬物追放ウイーク」の啓発グッズで、本学はミレービスケットとコラボし、学生に違法薬物の注意喚起を行いました。今年３月の林理事長と大貫進一郎学長の表敬訪問は、地元メディアでも取り上げていただきました。

▽「明日の覇者へ 日大アスリートの挑戦」では、創部１００年を迎えた野球部を追いました。東都大学春季リーグでは、残念ながら優勝とはなりませんでしたが、今後の活躍を期待しています。ひたむきに競技と向き合う学生の姿を、本誌から感じ取っていただきたいです。

▽本誌が読者の皆さまにとって、新たな発見や学びのきっかけになれば幸いです。次号もより充実した誌面をお届けできるよう、担当者として努めてまいります。

（K）

桜門春秋　2025 No.151 号

令和７年６月
編集人　小野 浩樹
発　行　日本大学広報部広報課
〒102-8275　東京都千代田区九段南 4-8-24
電話　03-5275-8132
E-Mail : honbukoho@nihon-u.ac.jp

自主創造
日本大学

日本大学広報部広報課

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24
Tel.03-5275-8132
URL https://www.nihon-u.ac.jp